

C CURRIER

海外で暮らす人のための情報誌 [クーリエ] Vol.19 2008 WINTER



「蓬莱(ほうらい)」(提供/塩瀬総本家)

Contents

- 03 インタビュー **村治佳織**さん
- 06 世界で頑張るニッポン **株式会社スタジオジブリ**
- 08 和の風 **京和傘**
- 10 **子育て相談室**
- 11 料理で楽しむ世界の旅 **グリビー・ヴ・スミターニエ**
- 12 連載エッセイ **田中都紀代**さん
- 13 **BOOKS** 話題の書・ランキング
- 14 **OCS** ウィンターギフト
- 15 インフォメーション・編集後記

「塩瀬総本家」は日本の饅頭の元祖といわれ、1349(貞和5)年始祖林浄因が中国より来日し奈良に住み餠入りの饅頭を製し宮中に献上。以来650余年、その「味と技」を絶やすことなく伝承しています。不老不死の仙人が住む山「蓬莱」と名づけられた饅頭は、中に入められた緑の餡が松。赤い餡と白い皮が紅白で縁起の良さを表しています。

和の風

日本文化の概念「和」その心、その美、その心を表現し、この時代の美意識を継承し、現代の生活に活用されています。



現代に開く、伝統の技巧

京和傘

雨や陽射しを除けるために開く「傘」。日本の伝統的な和傘は、仏教やお茶などと同じく平安時代に中国より伝来したと言われています。平安期の絵巻物に登場する傘は、現在と違い天蓋のような形状でした。当時は貴人に差しかける日除けや魔除けとして用いられ、権威を象徴するものだったと言えます。それまで、開いたままで閉じることが出来なかった傘が開閉できるようになったのは安土桃山時代。今や傘の開閉は当たり前になったのは驚きです。和傘は竹の田中を使った精密な構造であるため、少しでも計算が狂うと開閉できません。その



妻折野点傘

妻折(つまおれ)野点傘は、傘の端の部分が湾曲したデザインで小骨周りに施した美しい飾り糸を多用しているのが特長です。古来、僧侶や貴族など身分の高い方に対する差し掛け傘として使用され、現在でもお寺や神社で催されるお祭りや、茶道の野点(のだて)のお茶席などの伝統行事で使用されます。

特選番傘

江戸時代から民衆の間に浸透し、終戦前後までは家庭の代表的な雨具だった番傘。昔は旅館や商店が屋号を入れて「貸し傘」として利用していたため、その名残として今でも老舗の旅館などで見かけられます。



ため竹の骨組みは等間隔で、均等に重なり合う美しい幾何学模様が形作られます。数ある工芸品の中でも和傘ほど複雑に動作するものはそう多くないでしょう。

また一般に普及し始めたのは江戸時代中期からであり、これ以前は菅笠(すげがさ)と簀(み)の(が)雨具として活用されてきました。庶民の実用品として使われていたのが「蛇の目傘」と「番傘」。「蛇の目傘」は細身で軽く、綺麗な装飾が施された女性的な和傘です。一方「番傘」は、がっしり丈夫で男性的な趣きと重厚感があります。

古来、都として栄えた京都では早くから和傘が使用され、京都独自の美意識を持つ「京和傘」として発展しました。その京都に唯一「残る京和傘」「日吉屋」は、江戸時代後期から続く老舗。五代目当主・西堀耕太郎氏は、伝統的な京和傘にとどまらず、その優れた構造や美しさを生かしたインテリアグッズなども手掛けています。

昔のように生活必需品として使われることが少なくなってきた和傘。しかし歌舞伎や日本舞踊、茶道の世界では欠かせない道具であり、旅館や料亭のディスプレイやインテリアとしてなど、様々なシーンでその伝統美は活用されています。

協力/日吉屋 <http://www.wagasa.com/>

蛇の目傘

元々は上から見た形が「蛇の目」に似ていることから名付けられました。現在では無地の傘でも「蛇の目傘」と呼ばれます。色柄を区別する時には、蛇の目のデザインを「中入」または「助六」と呼んで区別しています。



蛇の目傘(無地・赤)



蛇の目傘(中入・紫白)

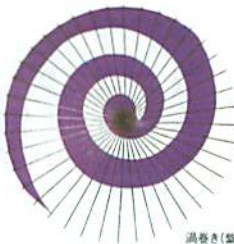


和紙日傘(舞傘)

小振りで色とりどりの舞傘は、日本舞踊や民謡などの小道具に活用されます。日常に生かす提案として日傘としての利用も。



花渦(紫)



渦巻き(紫)



満点桜(赤)